

事例発表

Case Presentation

第二部

生成AIの教育研究への活用



芝浦工業大学

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY
Established 1927
Tokyo

AIがもたらすカリキュラム設計の効率化

課程教育プログラムのカリキュラム作成支援

芝浦工業大学 荻谷義治



芝浦工業大学 工学部 課程編成
(2024年4月～)

より留学生を増やすべく、IGPを拡大するカリキュラム改革に着手している



学部改組時の新たなカリキュラム編成の課題

- ✓ 具体的なイメージを共有できず、抽象的な議論に終始
- ✓ 改組プロセスに長期間を要する
- ✓ 複数の視点を統合した設計に専門知識が必要となり、難易度が高い
 - 科目編成, DPとの整合性, 教員配置および人事計画, 学生ニーズなど
- ✓ 特に、既存教員がいる中でのカリキュラム作成では、カリキュラムが属人化しやすく、良いカリキュラムを作成しにくい
- ✓ 工学部課程制では、社会に合わせて、カリキュラムを柔軟に変えていく必要があり、カリキュラム編成に関する問題点を解決し、スピーディーに変更を進めたい



AI活用の目的:ドラフト提示による作業プロセスの促進

「ドラフト」が改革チームを動かす

- ✓ 具体的なドラフトがあることで議論が活性化
- ✓ 「ゼロから作る」より「叩き台を改善する」方が容易

議論の具体化・スピードアップ

- ✓ 理念を具体的、かつ詳細な形で伝える
- ✓ 抽象論から具体的な改善提案へ
- ✓ 意思決定プロセスの加速

改革プロセス全体の効率化

カリキュラム設計におけるAIの活用領域

- ①コンセプト設計
- ②海外カリキュラム分析
- ③学習内容・科目構成
- ④カリキュラムマップ
- ⑤科目配当表
- ⑥担当者割当・人事計画
- ⑦点検方法設計



項目番号順にプロンプトを入力し、その結果を見ながら必要に応じて、プロジェクト設定で入力したコンセプトプロンプトを修正、また、結果をファイル登録し、次の項目へ進み、アップデートされた条件で提案させる。

コンセプト設計

教育理念の言語化

- ✓ ここはAIに任せず、学部長の理念を言語化
- ✓ 学部長としての理念を学部長室で日頃より共有し、ドラフト提示の前に、学部内を同一の意識レベルに統一
- ✓ 日頃から自身の考えをメモ書き、整理し、設計段階のAIのプロンプトのベースとする
- ✓ コンセプトをプロジェクトに登録し、各段階の設計を統一したコンセプトのもとで提案させる



海外大学の工学系カリキュラムの分析

理工系学部の特徴的なカリキュラムを抽出

- ✓ MIT, Stanford, NUS, NTUなど
- ✓ 留学生向けプログラムの特徴分析
- ✓ 短時間で複数大学を分析可能

自学カリキュラム設計への反映

- ✓ 優れた教育手法の取り入れ
- ✓ 先進的な科目構成の参考

【プロンプト例】

国内外の一流大学の理工系学部のカリキュラムを分析し、優れた特徴を抽出してください。

【分析対象大学】

MIT, ETH Zurich, Stanford, NUS, NTU

【分析項目】

1. カリキュラム構成 (必修・選択比率、科目数)
2. 1-4年次の科目配置の特徴
3. 実験・PBL科目の導入状況
4. 留学生向けの特別な配慮
5. 本学IGPのカリキュラムは参考しない。

【出力形式】

各大学の特徴を表形式でまとめ、「取り入れるべき科目」を提案してください。

*このスライド以降のプロンプトや出力例はあくまでも例であり、実際のカリキュラムではありません



年次ごとの学修到達目標と科目構成

体系的な科目配置のドラフト作成

- ✓ 1年次から4年次までの学習の流れ
- ✓ 基礎→応用→専門の段階的構成
- ✓ 科目間の連携と順序性の検討
- ✓ 前提科目との関係性
- ✓ 学修効果を最大化する配置

全体像を俯瞰した検討が可能

【プロンプト例】

4年間カリキュラムを提案してください。

【前提条件】

- ・対象: 留学生(英語授業), アジア圏が中心
- ・卒業要件: 124単位
- ・学生特徴: 基礎数理は日本の高校生のレベルにない
- ・卒業時には日本語能力もつける(N2)

【各年次の目標】

1年次: 工学基礎、2年次: 専門基礎
3年次: 専門応用、4年次: 卒業研究・キャリア準備

【求める内容】

- 各年次ごとに以下を提案:
・年次ごとの学修到達目標
・おおまかな科目構成(科目名、単位数、必修/選択)
・各学期の推奨履修科目



科目構成の概要出力例

Proposed Four-Year Curriculum for the IGP Engineering Program (Shibaura Institute of Technology)

Overview: The International Advanced Program (IGP) in the Faculty of Engineering is a four-year Bachelor of Engineering curriculum (semester system) requiring 124 credits for graduation. All instruction is delivered in English (except language classes), aligning the program with global standards. The curriculum is designed to provide a strong foundation in mathematics and science in the first two years, introduce interdisciplinary problem-based learning (PBL) and research experiences early on, and then allow students to specialize in one of five engineering fields from the third year. Throughout the program, students also fulfill general education requirements (ethics, humanities, communication skills) and language requirements (Japanese students take English courses, international students take Japanese). The plan draws on best practices from world-class universities; for example, MIT emphasizes a broad scientific core in the first year, ETH Zurich integrates intensive project-based courses in the third year, and NUS incorporates design projects and entrepreneurship training in the undergraduate journey. The proposed IGP curriculum meets all the specified conditions and prepares graduates with a global outlook, strong technical skills (including AI proficiency), research experience, ethical grounding, and problem-solving abilities.

Year 1: Foundation in Mathematics, Science and Engineering (Common Curriculum)

Focus: Build fundamental knowledge in mathematics, physics, chemistry, and basic information computing, while introducing the role of engineering in society. Students establish core analytical skills and scientific literacy comparable to MIT's first-year master core (which includes math, physics, chemistry, etc.). A first-year seminar course also introduces engineering in societal context and the basics of teamwork and PBL.

- Mathematics Fundamentals: Calculus I and Linear Algebra I in Semester 1; Calculus II and Linear Algebra II in Semester 2 (total 8 credits). These courses develop a rigorous math foundation for all engineering fields (calculus, differential equations, linear algebra).
- Physics and Chemistry Basics: Physics I (Mechanics) and Chemistry I in Semester 1; Physics II (Electricity & Magnetism) and Chemistry II in Semester 2 (each 2 credit, 4 credits total). These provide fundamental principles of classical mechanics, electromagnetism, and general chemistry that underpin engineering science.
- Computing/Information Basics: An introductory programming and data science course (Information Science I) in Semester 1 (2 credits) teaches algorithmic thinking and coding in

年次別の科目構成概要を見て、自分のイメージと合うまで、繰り返し指示を与え、コンセプトが実現できているかの確認されたら、科目配当表の作成へ



科目配当表とカリキュラムツリー作成

- ✓ 科目構成の詳細確認
- ✓ 学修達成目標との対応の可視化
- ✓ 卒業要件、CAPの確認
- ✓ カリキュラム全体の体系性確認
- ✓ 目標達成に必要な科目の網羅性

【プロンプト例】

科目配当表を作成し、さらに学修到達目標と科目の対応を見るカリキュラムツリーを作成してください。

【学修到達目標】

学修到達目標1:.....
学修到達目標2:.....
学修到達目標3:.....

【求める内容】

1. 各科目の対応度2. 履修順序
3. 学修達成目標との対応で不足している領域の指摘
4. カリキュラム全体のバランス評価

1・2年次共通科目配当表 / Common Courses for 1st and 2nd Year

科目区分 Course Category	科目名 Course Name	1年前期 1st Year Spring	1年後期 1st Year Fall	2年前期 2nd Year Spring	2年後期 2nd Year Fall
数学基礎 Mathematics	微積分学 Calculus I	2	-	-	-
	微積分学 Calculus II	-	2	-	-
線形代数 Linear Algebra I	線形代数 Linear Algebra I	2	-	-	-
	線形代数 Linear Algebra II	-	2	-	-
応用数学入門 Introduction to Applied Mathematics	応用数学入門 Introduction to Applied Mathematics	-	2	-	-
	微分方程式 Differential Equations	-	-	2	-
確率統計 Probability and Statistics	確率統計 Probability and Statistics	-	-	2	-
	フーリエ解析 Fourier Analysis	-	-	-	2

科目への教員割り当て

現有教員の専門分野と担当可能科目から、
負担が均等になる割当案の提案

担当者不在の科目をリストアップし、非常勤、
または、採用計画を立案

新規採用教員提案(人数・分野・担当授業)

採用区分	専門分野・研究領域	主な担当授業(履修)	備考/必要性
1. 土木・社会基盤系 教員 (新規1名)	構造力学、創製工学、地盤・水理、インフラ維持管理	・構造力学(3年)・地盤工学(3年)・水理学(3年)・土木プロジェクト演習(3年)	5課理連携上、最重要欠員分野、豊洲キャンパスで実験環境あり。
2. 電気電子系 教員 (新規1名)	電子デバイス、回路設計、半導体工学、電力変換	・回路理論I/II(2年～3年)・電子回路実験(3年)・半導体デバイス(3年)	現在AARYASHIIEのみ、教育負担過多につき補充。
3. 応用数学・データ科学 教員 (新規1名)	応用数学、数値解析、最適化、AI数値基盤	・線形代数I/II(1年)・数値計算法(2年)・AI for Science(4年)	HASEGAWA 教授の負担軽減と数値教育の取り組み。
4. 物理実験・自然科学教育 教員 (新規1名)	実験物理、測定科学、基礎工学実験設計	・工学基礎実験I/II(1・2年)・物理基礎(1年)・科学計測実験(3年)	実験教育負担が物理、化学系に偏っているため必須。
5. 教養・国語 教員(現職または専任非常勤1名)	テクニカルコミュニケーション、日本語・英語アカデミックライティング	・リサーチライティング(4年)・ビジネス日本語(4年)・プレゼンテーション入門(3年)	YOSHIMIZO 教員の負担軽減、国際学生増加を踏まえ必須。

学修成果等の点検案

「IR／教育評価指針」の考え方を踏まえ、学修成果点検の体系(PDCAサイクル)を設計させる。

I. 点検目的と基本方針

- 目的：
新カリキュラム(124単位の)の運用において、
- ・教育目標(5)学修成果・能力・専門応用力・課題解決力・国際コミュニケーション・倫理リーダーシップ
 - ・教育プロセス(授業・実験・演習・研究の質)
 - ・学生満足度・教育改善策
 - ・卒業後のキャリア成果(進学・就職)
- の4観点を設定、定時の両面から点検し、
PDCAサイクルで毎年改善を図る体制を構築する。

II. 点検指標 (KPI) 体系

区分	点検指標 (Key Performance Indicators)	測定内容/評価方法
① 学修成果 (Learning Outcomes)	・各学修到達目標(3)達成度・GPA/履修率/退学・日本語能力/卒業研究評価	①授業満足度(到達度アンケート)②各専攻科/専攻科目の平均GPA③卒業研究最終発表スコア④英語TOEIC/日本語能力試験スコア
② 教育プロセス (Teaching Process)	・授業実施状況、アクティブラーニング率、FD参加率	①授業アンケート(授業満足度)②授業観察・ピアレビュー③FD研修参加率・実施回数
③ 学生満足度 (Student Experience)	・授業満足度、学修環境、相談体制、研究支援	①キースアンケート(授業満足度・学修生活満足度)②フォーカスグループインタビュー③留学生の生活支援評価
④ キャリア成果 (Career Outcomes)	・進学率・就職率・グローバル企業就職率・キャリア満足度	①卒業生追跡調査(進路アンケート)②企業採用アンケート③インターンシップ成果報告

III. データ収集・分析方法

データ種類	収集方法	担当部門	分析内容
学修成果データ リサーチ評価	LMS (Moodle/Canvas) 上の課題・試験結果、到達度レポート	各専攻科/専攻、教育研究	GPA分析、到達度目標達成率、学生別達成
授業評価データ	学修到達目標アンケート(学修満足度)	教育研究・教育	授業満足度・授業改善

おわりに

AIは一般的な案を提示

AIは「たたき台」であり「最終案」ではない。

大学固有の強みや特色は人間が付加し、段階的なアプローチにより、より良い案ができあがる(AIとの対話の繰り返し)。

AIドラフトの提示がチーム協働を促進

「たたき台」により議論が具体化し、合意形成が迅速化

AIと人間の協働による質の高いカリキュラム設計

AIの効率性 × 人間の創造性

生成AIを産業エンジンに ～教育・研究・社会応用の統合アプローチ～

2025.11.29

福井工業大学

AI & IoTセンター

工学部 電気電子情報工学科

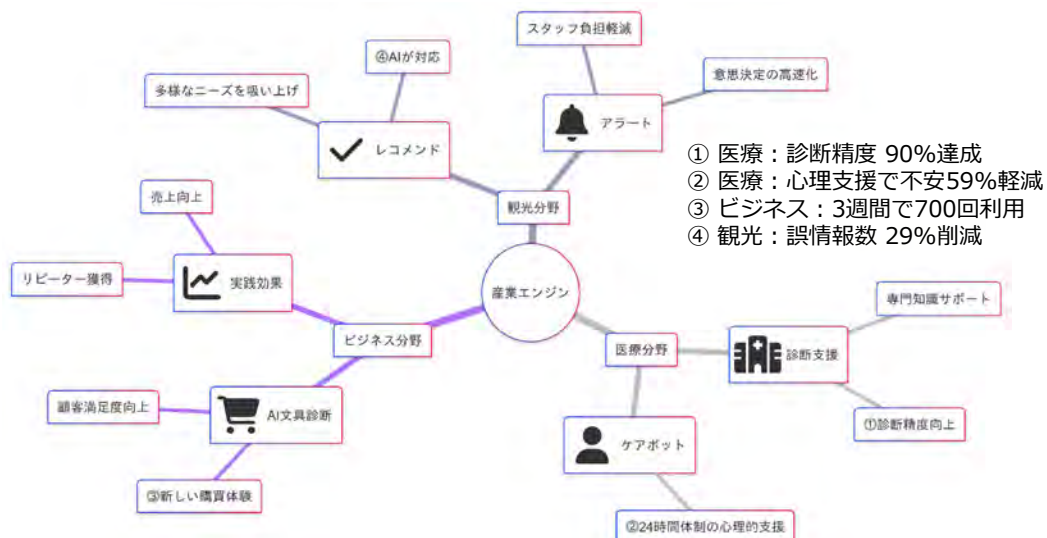
芥子 育雄

地域社会への応用の試み ～試行錯誤が生んだ**産業エンジン**モデルへの挑戦～

- 医療・観光・ビジネスを同時に実証
- データは違っても **共通エンジン** が機能する
- **共通基盤×多産業 = 新しい競争力**
- **生成AI活用で「地域で選ばれる大学」** へ。

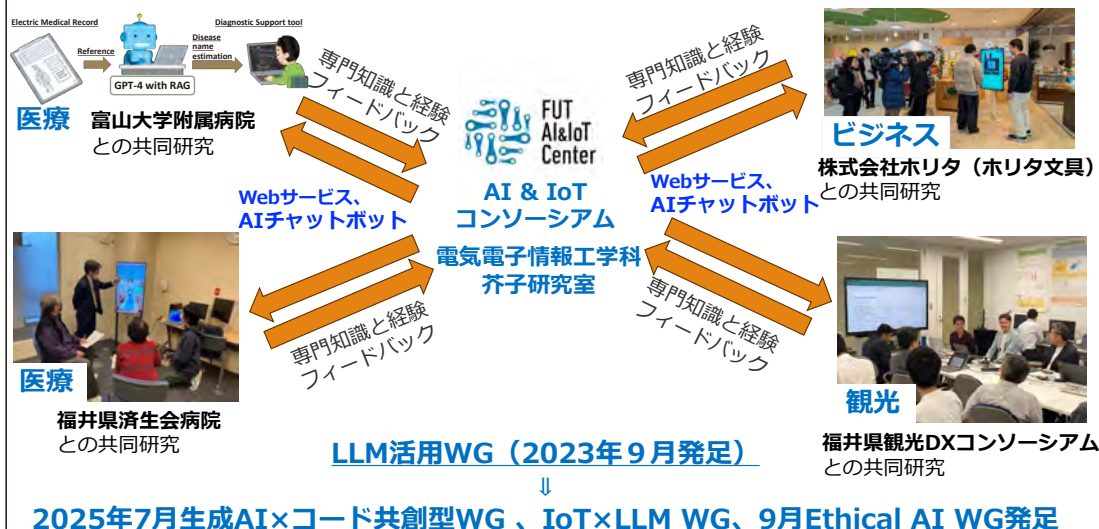
2

生成AIを産業エンジンに



3

生成AIの社会応用（学生に対する実践の場の提供）



観光応用 数万件のアンケートデータを元にした生成AI活用による パーソナライズしたおすすめプランと観光地ギャラリー

年齢層: 10代
性別: 女性
同行者: 友人
希望旅行月: 10月
旅行の希望: 越前町から、バスで20人で体を動かす遠足をしたい

パーソナライズされたおすすめプラン

はい、承知いたしました。10月に越前町からバスで20人の友人たちと、体を動かす遠足ですね！10代の女性に喜んでもらえるような、アクティブで思い出に残るプランを提案します。

テーマ：越前海岸を満喫！絶景とアクティビティで友情を深める旅

1. 移動手段：

- 越前町から貸切バスを手配。20人なので、マイクロバスまたは中型バスがおすすめです。

2. スケジュール案：

- 午前：越前海岸シーカヤック体験（約2時間）
 - 場所：越前海岸のシーカヤック体験施設（事前に予約必須）
 - 内容：穏やかな海でシーカヤック体験。インストラクターの指導のもと、初心者でも安心して楽しめます。美しい越前海岸の景色を海上から眺めるのは格別！
 - ポイント：グループで協力して漕ぐことで、一体感と友情が深まります。写真撮影タイムも忘れずに！



医療応用

がん患者支援ケアボット – システム構成 –

■ 技術構成

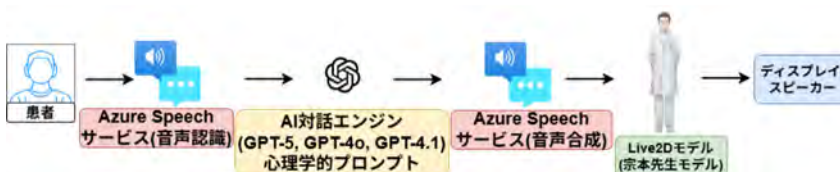
- Azure OpenAI GPT-4o/4.1/5-chat + Azure Speech（音声認識合成）+ Live2D（2Dアニメーション）

■ 3つの対話モード

- GPT-5-chat（詳細）：深い悩み相談
- GPT-4o（標準）：一般的な相談
- GPT-4.1（簡潔）：情報確認

■ データソース

- がん体験者の声を活用（RAG）
- 福井県済生会病院のがん患者向け取り組み他（システムメッセージ）



医療応用

心理学的アプローチの統合

■ プロンプト設計への心理学的知見の活用

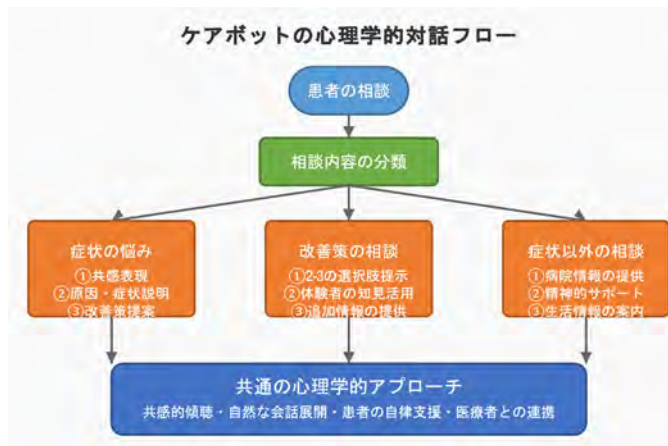
- 共感表現の最適化
- 患者心理への配慮

■ 対話フローの改善

- 一方的な情報提供から双方向の対話へ
- 医療者へのスムーズな情報共有の実現

■ 臨床研究での効果検証

- 対話ログ分析
- 患者が詳細な悩みを打ち明けるケースの確認



7

医療応用

開発経緯と成果

■ 3段階の評価

- Phase 1 (2024年7月) : 医療従事者レビュー(≈10)
- Phase 2 (2024年9月) : 一般市民体験 (n=27)
- Phase 3 (2024年12月) : 外来患者の臨床研究 (n=16)

■ 臨床研究での主要成果

- 35% : 医師に聞きにくい内容を相談
- 59% : 不安軽減を実感
- 53% : 医療情報を信頼

■ 課題と改善

- 60%が音声入出力に困難 → 2025年3月にAzure Speech導入、リップシンク改善
- 若い医師像の信頼性不足 → 2025年4月に高齢医師アバターへ変更



8

医療応用

臨床研究 (n=16) から見たこと

■ 患者さんの本音 (実例)

- 60歳未満・乳がん「遺伝のことが心配…」 → 診察では聞けなかったことを相談
- 60代・転移あり「将来が不安…でも医師には何を聞けばいいかわからない」
→ AIと話して考えを整理してから医師に相談
- 60代・脾臓がん再発「あと何年生きられる？」
→ AIは統計情報を回答、カウンセラーがすぐフォロー (要注意ケース)

■ 分かったこと

- 60代 : よく使いこなせた
- 70代以上 : 音声認識に苦労 (60%)
- AIは「練習相手」として有効 : 診察前に考えを整理する、質問を準備する
- でも人間の見守りは必須

9

医療応用

ケアボット（デモ）

- 基本対話 「最近眠れなくて…」への応答
- 共感的応答 不安な気持ちへの対応
- 危険ワードへの対応、予後の質問への言い換え表現
- 医師向けダッシュボード

10

教育応用

PBL AIアシスタント－教育向けデータ分析学習支援システム－

- 概要：
 - 生成AIを活用したデータ分析学習ツール。学生や企業研修者が、実データを使いながらAIとの対話を通じて、データ分析スキルとプロンプトエンジニアリング能力を習得
- 開発背景：
 - 「AIが即答してしまうと学生が考えなくなる」という教育課題に対し、「問いを立てる力」と「結果を検証する力」を育成するために開発。
- 特徴：
 1. 正確な数値分析：推測ではなく実際の計算結果を利用、制限：多くの値の同時計算
 2. プロンプトの重要性を実感：曖昧な質問vs具体的な質問の違いを学ぶ
 3. 段階的思考：複雑な問題を分解して考えることを学ぶ
- 一言で説明すると「生成AIを使いこなすための実践的な学習環境」

11

教育応用

【デモ】段階的な分析

- CSVファイルの恐竜博物館の来館者数列について、以下を段階的に分析：
 1. 来館者数のヒストグラムを描いて分布の特徴を解説
 2. 来館者数の基本統計量（平均、中央値、標準偏差）を計算
 3. なぜ平均と中央値に差があるか説明
 4. 外れ値の影響を定量的に示す
 5. わかりやすく解説する文章を作成して
 6. この分析結果をもとに恐竜博物館の戦略を示して

12

医療現場でのデータ分析例 - 外来患者の待ち時間改善

Step 1: 基礎分析

「診療科別の平均待ち時間を計算」

→ 内科45分、整形外科75分、眼科30分

Step 2: 要因分析

「整形外科の待ち時間が長い要因を
曜日別・時間帯別で分析」

→ 月曜午前が特に混雑（平均95分）

Step 3: 改善提案

「待ち時間短縮のための具体的施策をデータに基づいて提案」

→ 予約枠の調整、スタッフ配置の最適化

【サンプルデータ構造】

外来患者待ち時間データ（匿名化済み）

- date: 診察日
- department: 診療科
- day_of_week: 曜日
- arrival_time: 到着時刻
- wait_minutes: 待ち時間（分）
- age_group: 年齢層

13

高校体験授業

■ 【実施概要】

- 日時：2025年10月3日90分
- 対象：中高一貫高校1年～3年50数名
- 形式：体験型授業

■ 【授業構成】

- PBL AI Assistant（体験データサイエンス）
- デモ：3つの研究成果紹介
 - ▶ ケアロボット対話デモ、AI文具診断（顔認識）、観光レコメンド

■ 【反響】

- 25件のコメント（50%参加率）
- 「データ分析を部活をやっていた時に知りたかった」
- 「質問の仕方の難しさがわかった」
- 広報記事「驚きの声」



14

教育×研究の相乗効果と展開可能性

【相乗効果】

- 研究成果が即教材に
- 地域の課題が研究課題に
- 実データでの実践教育

【他大学への展開】

- オープンソース化検討中（githubでソースを管理）
- 工大間連携の可能性
- 共同研究の募集

【まとめ】

- 生成AIを「使う」教育から「創る」教育への転換
- 産学連携による 実データ活用の倫理と効果

15

大学での学びと生成AI

～北海道科学大学の現状～

2025.11.29
情報科学部 情報科学科 真田博文



生成AIの急速な普及と大学教育への影響

変革期を迎える高等教育と社会全体の課題

急速な浸透と利用実態

26.7%

日本の生成AI利用率¹⁾

47%

大学生の生成AI利用率²⁾

80%

AI による就業者への影響予測¹⁾

出典: 1) 総務省「令和7年版 情報通信白書」
2) 一般社団法人データサイエンティスト協会(2024.12)

社会全体への影響と課題



教育制度の再構築

評価方法の見直し、学習体験の個別化、教員の役割変化



労働市場の構造変革

必要スキルの再定義、雇用構造の変化、教育-就職の接続再考



学術倫理と剽窃問題

オリジナリティの再定義、評価基準の変更、研究公正性



デジタル・AI格差

リテラシー格差、アクセス格差、経済・地域間格差の拡大

求められる社会的対応

- ✓ AI時代のリテラシー教育の体系化と普及
- ✓ 教育機関・企業・政府の連携体制の構築
- ✓ 倫理的・法的フレームワークの整備
- ✓ 格差是正のための政策的アプローチ

× AIが教育を変える

○ AIを理解する教育者が教育を変える

2

北海道科学大学



工学部



情報科学部



薬学部

- 機械工学科
- 電気電子工学科
- 経済環境学科
- 情報工学科 (2025年4月1日より情報科学部 情報科学科に改編)
- 建築学科



未来デザイン学部



保健医療学部

学生: 4,482人

教員: 235人

3

第2部プレゼンテーションのメインテーマ

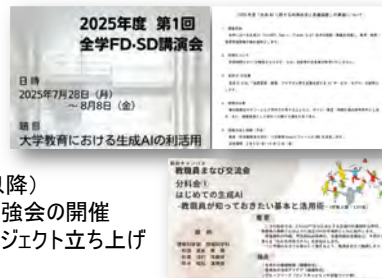
『生成AIを活用した授業支援やデータ解析、画像・映像生成など各大学が取り組んでいる生成AIの教育・研究への活用事例について』



生成AIの教育/研究での利活用における北海道科学大学の現在位置は？

大方針(2023年度)

学内への方向性提示(2023年度)



(2024年度以降)
・FD・SDや勉強会の開催
・DX推進プロジェクト立ち上げ

2025 生成AIに関する利用状況と意識調査(教員対象)

○調査目的:生成AI(ChatGPT、Gemini、Claude など)活用の実態・課題を把握し、教育・研究・業務支援施策の検討資料とする。

- ・所属学部等、大学教員歴、年代
- ・生成AIの利用経験
- ・主に使用しているサービス(複数可)
- ・利用する主目的(複数可)
- ・直近1か月の平均利用頻度

- ・[効率化] ご自身の研究の効率の変化について教えてください。
- ・[効率化] ご自身の授業準備等の効率の変化について教えてください。
- ・[効率化] ご自身の校務等の効率の変化について教えてください。

- ・[支援] 生成AIの利用に関する主な障壁は何ですか(最大3つ選択)
- ・[支援] 大学に望む支援策があればお書きください。

- ・他に何かあれば自由にお書きください(成功事例・失敗事例・提案など)

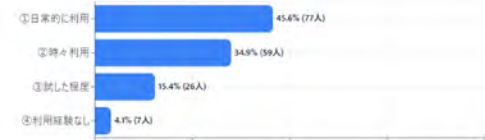
169名から回答

2025 生成AIに関する利用状況と意識調査(結果①)

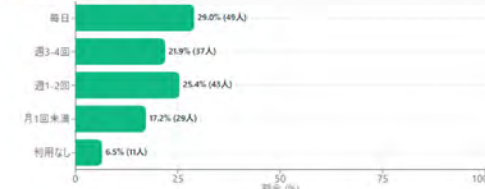
生成AIの利用経験と頻度

約91%の教員が日常的または時々利用(136人/169人)

利用経験



直近1か月の平均利用頻度



学部別 生成AI利用経験

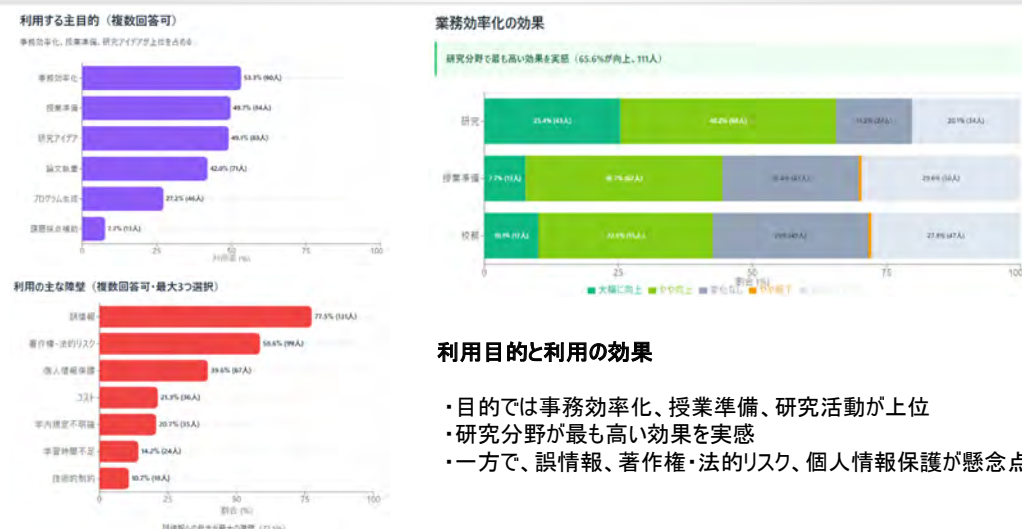
情報科学部(72.7%)と保健医療学部(60.5%)で日常利用率が高い

	①日常的に利用	②時々利用	③試した程度	④利用経験なし	合計
保健医療学部	60.5%	39.2%	4.7%	4.7%	43人
薬学部	47.8%	40.5%	9.5%	2.4%	42人
工学部	31.3%	40.6%	21.9%	6.3%	32人
未来デザイン学部	42.9%	23.8%	28.6%	4.8%	21人
全学共通教育部	27.3%	36.4%	36.4%	0%	11人
情報科学部	72.7%	27.3%	0%	0%	11人
非常勤教員	11.1%	44.4%	33.3%	11.1%	9人

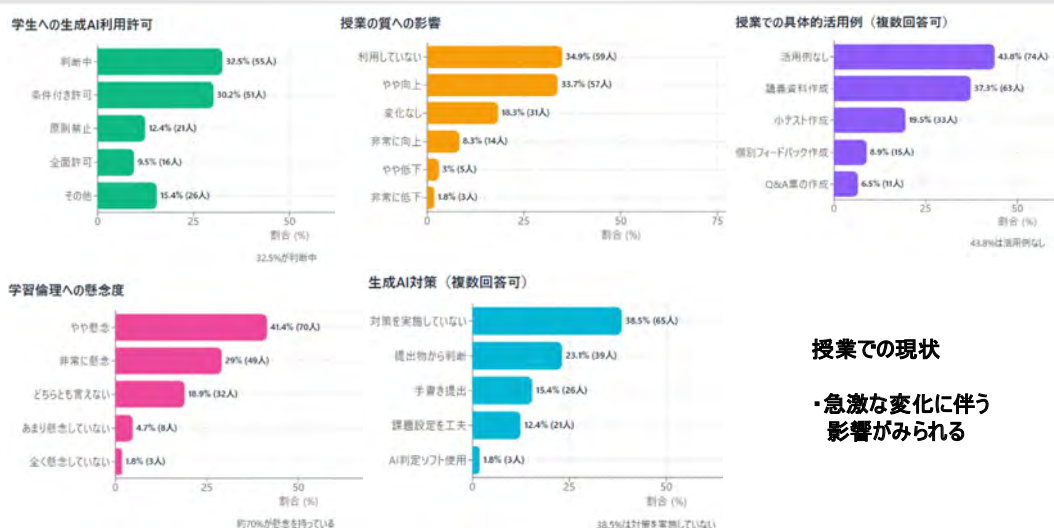
利用状況まとめ

- ・生成AIはすでに身近なツールに
- ・学部・年代で使い方に差
- ・次の焦点は「どう活かすか」

2025 生成AIに関する利用状況と意識調査(結果②)



2025 生成AIに関する利用状況と意識調査(結果③)



2025 生成AIに関する利用状況と意識調査(結果④)

学生への生成AI利用許可:

- 約32%が「判断中」で明確な方針なし
- 組織的ガイドラインの必要性

効果と懸念の矛盾:

- 42%が授業の質向上を実感する一方、70%が学習倫理に懸念
- この両立する現実が許可判断を困難にしている

対策の限界:

- 最多の対策は「提出物から判断」(23%)で事後的・主観的
- 教育設計の本質的見直しは道半ば

活用の偏り:

- 講義資料作成(37%)など効率化中心、個別フィードバック(9%)など教育の質向上は道半ば
- AIを学生支援に十分には活かしていない

認識と実態のズレ:

- 44%が「活用例なし」だが学生は既に使用している可能性
- 教員と学生の間に情報・認識ギャップが存在する可能性

まとめ 北海道科学大学の現在と未来

📌 現状：活用の広がりと「壁」

教員の約8割がAIを利用し、
研究・授業・校務の効率化を実感

7割が学習倫理に懸念、学生への
利用許可は「判断中」が最多

「個人レベル効率化」は進むものの
「教育への本格導入」にはためらい

🚀 挑戦：3つのアプローチ

教育の再設計

生成AIの利用を前提とした、
新たな授業・評価モデルの構築

活用の高度化

学生を巻き込みながら教育・
研究を深化

DX基盤の構築

データ駆動型による教育DXの
可能性を追求

💡 展望：「教育の深化」へ

🔵 統一ルール、
評価法の整備

「個人レベルの効率化」から
「大学全体の教育価値向上」へ

AIも活用しながら、新たな
価値を創造する人材育成を
大学一丸となって目指す

13

挨拶・講演

学長プレゼンテーション

学生プレゼンテーション

事例発表